

Foreword		
<i>NARUMOTO Jin</i>	1
Special Articles		
Sexuality of Middle-aged and Older Adults - what we have learned from previous research - <i>ARAKI Chineko</i>	2
Collaborating with industry to develop innovations to improve older adults' life <i>HIYAMA Masami, OBA Hikaru, NARUMOTO Jin</i>	25
Introduction to statistical methods for analyzing single-case research data by focusing on effect size indices <i>YAMADA Tsuyoshi</i>	35
Original Articles		
Seamlessly Operating Social Spaces in Depopulated Areas - Analysis of Interviews with Community-Based Comprehensive Support Center Staff - <i>SAITO Kenji</i>	56
Developing the Motivation for Day Service Center Scale for older Japanese adults and its relationship with well-being <i>HORIGUCHI Kouta, OKAWA Ichiro</i>	67
Understanding lifestyle needs and wishes of older adults with mild cognitive impairment and early dementia in regular outpatient care <i>FUJITA Yu, OBA Hikaru, MIYA Hiroaki, NAKANO Akiko, SONODA Kaoru, SUGINO Masakazu</i>	84
Articles		
Prevention of falls in Parkinson's disease patients - fall characteristics and the on-off phenomenon - <i>FUJII Chieko, IWASA Yumi</i>	99
Book Review		113
This year of the Japanese Society of Geriatric & Gerontological Behavioral Sciences		114

巻頭言		
成本 迅	1
特別論文		
中高年のセクシュアリティ — これまでの研究から見えてきたこと — 荒木 乳根子	2
高齢者の生活に役立つイノベーションを創出するための産業界との連携について 樋山 雅美・大庭 輝・成本 迅	25
単一事例データのための統計的方法について — 効果量を中心に — 山田 剛史	35
原著・研究報告		
過疎地域における社会的居場所の円滑な運営方法の検討 — 地域包括支援センター職員へのインタビュー調査から — 齋藤 建児	56
高齢者の通所介護利用動機づけと生きがい感の関連 — 自律的 — 統制的動機づけの枠組みから — 堀口 康太・大川 一郎	67
外来通院中の軽度認知障害と初期認知症の高齢者本人における ニーズおよび生活への願望の把握 藤田 雄・大庭 輝・宮 裕昭・中野 明子・園田 薫・杉野 正一	84
資料・研究ノート		
パーキンソン病患者の転倒予防 — オンオフ現象の有無からみた転倒の特徴と転倒予防自己効力感の分析を通して — 藤井 千枝子・岩佐 由美	99
著者による本の紹介		113
日本老年行動科学会 この1年(2020年):大川 一郎	114
日本老年行動科学会報告	117



中高年のセクシュアリティ —これまでの研究から見えてきたこと—

荒木 乳根子* 田園調布学園大学名誉教授

筆者は1990年に高齢者のセクシュアリティについての調査研究をして以来、約30年にわたって中高年のセクシュアリティおよび高齢者の性と介護に関する調査研究・事例検討を研究テーマにしてきた。本論文では、これまでの調査研究について、年代に沿って概要を述べ、そこから見えてきたことをまとめた。さらに調査研究をベースに上梓した主著を紹介した。中高年のセクシュアリティについては、日本性科学会セクシュアリティ研究会（代表：荒木）での調査から夫婦間のセックスレス化が明らかになった。筆者らは性的な触れ合いは人生の後半の生を豊かにすると考え、セックスレスの要因を分析し、男女双方にとってより良い性生活を築くための提案を試みた。高齢者の性と介護については、職員への性的行動、利用者間の好意・恋愛に基づく性的行動を中心に述べた。前者では、利用者の性的行動をただ問題行動として抑止するのではなく、心理的内的欲求の理解に基づいて対応する必要性を提案した。後者では、利用者のQOLの充実に軸足を置いて、他の利用者や家族との調整を図っていく姿勢が望ましいとした。

キーワード ⇒ 高齢者介護, 中高年, 性的行動, セクシュアリティ, セックスレス

高齢者の生活に役立つイノベーションを創出するための 産業界との連携について

樋山 雅美* 京都府立医科大学大学院医学研究科
大庭 輝 大阪大学大学院人間科学研究科
成本 迅 京都府立医科大学大学院医学研究科

本稿では、高齢者の生活に役立つサービスや製品を創ろうとする民間企業に対して専門職の立場でどのように関わっていけばよいかについて、これまでの取り組みを紹介すると共に、留意点や今後の展望について解説した。サービスとしては、金融界との取り組みと協働した経験について紹介し、業界としての課題や専門職として果たすことができる役割について解説した。製品としては、介護施設にロボットを導入する取り組みについて紹介し、その課題と今後の展望、施設や専門職として関わる時の留意点について解説した。高齢化社会の先頭を走る日本において、イノベーションを創出することは重要であり積極的に産業界と連携することを提案したい。

キーワード ⇒ 産学連携, イノベーション, 民間企業, 金融機関, ロボット

単一事例データのための統計的方法について —効果量を中心に—

山田 剛史* 横浜市立大学国際教養学部

単一事例データの評価のため、様々な統計的方法が提案されている。

本稿の目的は、単一事例データのために開発された効果量 (Effect Size) を解説することである。

さらに、効果量を用いて行われる、複数の単一事例研究の統計的な統合の手法であるメタ分析についても紹介した。マルチレベルモデルを用いた単一事例研究のメタ分析、単一事例データへのベイズモデリングの適用についても述べた。

キーワード ⇒ 単一事例研究法, 単一事例実験データ, 統計的方法, 効果量, メタ分析

過疎地域における社会的居場所の 円滑な運営方法の検討 —地域包括支援センター職員へのインタビュー調査から—

齋藤 建児* 旭川大学保健福祉学部

本研究は、過疎地域における社会的居場所の円滑な運営方法の検討を目的とした。本調査は、山形県酒田市の
中から、中心市街地、人口集中地区、混住化が進む地域、農村地域の地域包括支援センター職員を対象に半構
造化面接を行った。研究方法は、KJ法を用いて探索的に検討した。その結果、①地域包括支援センターが地
域住民へ社会的居場所の必要性を説明するとことで、主体性が引き出され、社会的居場所の立ち上げや円滑な
運営が可能になる。②生活支援コーディネーターが地域のストレンクスを生かす視点に基づき、地域住民のサ
ポーターや既存の組織と協働することにより社会的居場所の運営が円滑になる。③地域包括支援センターは社
会的居場所の運営支援を通じて地域診断が可能になるため、顕在化、潜在化した問題の把握が可能となる。④
移動困難な地域は、既存の空きスペースを活用することより、社会的居場所の不足を補うことにつながる。以
上、4つの知見が示された。

キーワード ⇒ 過疎地域, 社会的居場所, 円滑な方法, KJ法

高齢者の通所介護利用動機づけと生きがい感の関連 —自律的—統制的動機づけの枠組みから—

堀口 康太* 白百合女子大学 人間総合学部 発達心理学科
大川 一郎 筑波大学 人間系

本研究の目的は自律的—統制的動機づけの枠組みから、高齢者の通所介護利用動機づけを測定する尺度を作成し、動機づけと well-being の関連を検討することであった。通所介護利用者を対象とした聞き取り調査から動機づけを測定するための54項目を選定した後、463名の通所介護利用者に質問紙を配布し、回収した回答のうち233名 ($Mage = 82.13, SD = 7.30$) を有効回答として分析に用いた。54項目について探索的因子分析を行ったところ、「対人関係と内発的興味」、「身体機能や日常生活の改善」、「不活発さの補償」、「不安・孤立状態の解消」、「周囲の人からの勧め」という5つの因子が抽出された。このうち前者4つは自律的動機づけ、最後の1つが統制的動機づけとして位置づけられた。次にこれらの動機づけと well-being の関連を検討したところ、「対人関係と内発的興味」、「身体機能や日常生活の改善」が well-being と関連し、自律的な動機づけプロフィールを有している方が他のプロフィールより well-being の得点が高いことも確認された。本研究の結果から、高齢者の well-being を促進するためには、高齢者の自律的動機づけを支援することが重要であることが示唆される。

キーワード ⇒ 自律的動機づけ, 統制的動機づけ, 通所介護, 高齢者, ウェルビーイング

外来通院中の軽度認知障害と初期認知症の 高齢者本人におけるニーズおよび生活への願望の把握

藤田 雄*	藍野病院
大庭 輝	大阪大学大学院人間科学研究科
宮 裕昭	市立福知山市民病院
中野 明子	藍野病院
園田 薫	藍野病院
杉野 正一	藍野病院

本研究の目的は、第一に外来通院中の軽度認知障害（MCI）と初期認知症の高齢者本人のニーズおよび生活への願望の内容と出現頻度を把握することであり、第二にMCIと初期認知症それぞれのニーズおよび生活への願望の特徴を検討することである。対象はもの忘れ外来通院中のMCI 17名、初期認知症 20名の計37名であった（男性11名、女性26名、平均年齢80.6±5.50歳）。半構造化面接によりニーズおよび生活への願望を聴取し、得られた回答をテキスト化し、計量テキスト分析をした。計量テキスト分析にはKH Coder 3を使用した。調査の結果、ニーズがひとつでもないと回答したのはMCIの58.8%、初期認知症の35.0%であり、初期認知症の本人は身体面に関するニーズ以外はほとんど表出しない特徴があった。MCIと初期認知症の比較では、初期認知症はMCIに比して否定的感情が少なく、夫との関係に関するニーズが0個だったことが特徴的であった。一方、生活への願望はすべての対象者から表出された。MCI、初期認知症ともに最も出現率が高かったのは、現在の生活の維持・継続であった。ただし、初期認知症はMCIに比して自己充足的な活動や楽しみについて表出しない点が特徴的であった。ニーズや生活への願望の抑制には、認知機能障害だけでなく、発症前後から長期間に渡って傷ついた自尊心も影響すると考えられた。

キーワード⇒ 認知症、軽度認知障害、診断後支援、支援ニーズ、KH Coder

パーキンソン病患者の転倒予防 —オンオフ現象の有無からみた転倒の特徴と 転倒予防自己効力感の分析を通して—

藤井 千枝子* 慶應義塾大学 看護医療学部
岩佐 由美 神戸大学大学院 保健学研究科

本研究は、パーキンソン病 (PD) 患者のオンオフ現象の有無からみた PD 患者の転倒の特徴から転倒予防の示唆を得ることを目的とした。

「一般社団法人・全国 PD 友の会」の東京都 PD 友の会の協力を得て、2017年2月に会員822名に対し、無記名自記式質問紙を郵送した。年齢や性別などの基本属性の回答と転倒に関する調査項目に無記入項目がない336名 (有効回答率40.9%) を分析対象者とした。

オンオフ現象の有無により分類し、オンオフ現象がある回答者が136名 (40.5%)、ない回答者が200名 (59.5%) であり、オンオフ現象がある群とない群として分析した。平均年齢はある群が71.9 ± 7.9歳、ない群は73.8 ± 7.4歳であった。オフ時間の平均が5.6 ± 4.3時間であった。また、前月に転倒があった140名の受傷部位、転倒時の場所と状況を比較し、ある群は立つ時と服の着脱時に転倒が多く、頭部や臀部を受傷した割合が高かった。転倒予防自己効力感の得点はオンオフ現象の有無に関わらず全体的に低く、重症度が上がるとともに平均得点が下がった。

オンオフ現象がある場合は、運動症状を多く有し、薬物の調整が困難となることが考えられ、転倒予防の視点から一つの指標として重要である。PD患者の転倒予防は、①転倒予防自己効力感を支えること、②オンオフ現象のある場合のオン状態とオフ状態それぞれの転倒予防、③自立した活動の時期の転倒予防と介助を伴う時期の転倒予防が必要と思われた。

キーワード ⇒ パーキンソン病, 転倒, オンオフ現象, 転倒予防自己効力感